

## 聴覚の障害が子どもに及ぼす影響と教育の必要性

大沼直紀（教育方法開発センター）

ノエル・マトキン（アリゾナ大学）

### 1. 難聴が子どもの教育に及ぼす影響

子どもが心身ともに発達し学習している時期に聴覚に障害が起こると、それが早い段階に起これば起こるほど、子どもに与える影響はより深刻となる。同様に、問題の発見と援助を初期の段階で適切に行えば行うほど、全体的な発達に及ぼす影響の深刻度は小さいものとなる。重い難聴の発見に比べて軽度から中等度の子どもの難聴の発見は遅れることが多い。聞こえているように見えるし、言葉も発達しているように見えるからである。しかし、音としては聞こえていても意味を理解しにくいままの状態であったり、聴力型によっては音声の一部が聞こえていないまま成長し、後になって言語発達の問題に気がつく場合もある。

#### 1. 1 聴覚の障害を放っておくと以下の5つの影響が子どもにあらわれる。

- ① 聴覚を通して物事の意味を学ぶ聴能の発達の遅れが言語の獲得を遅らせる。
- ② 就学前に必要な発話能力と言語の理解力・表現力の発達が遅れる。
- ③ 言語能力が十分でないので学習上の問題が起き、特に言葉を使う教科の成績が落ちてしまう。
- ④ コミュニケーションが円滑に行えないことから社会的孤立感を感じ、自分についてのマイナスイメージを持つようになる。
- ⑤ 進路や職業の選択が限られてしまい生涯に渡って影響が及ぶ。

聴覚の障害による教育への影響はそれぞれの子どもによって様々であるが、言語、学業、心理・社会性の面で現れやすいいくつかの共通点がある。その特徴的なことをまとめてみる。

#### 1. 2 語彙

- ① 聴覚障害児は、目に見える具体的な単語は、抽象的な単語に比べて簡単に覚える。しかし、助詞などの機能語を誤用することが多い。
- ② 聴覚障害児は複数の意味をもつ多義語の理解が困難である。
- ③ 正常な聴力の子どもに比べて聴覚障害児は語彙の発

達が遅れ、その差は年齢が大きくなるにつれて拡大する。

#### 1. 3 構文

- ① 聴覚障害児は、短くて単純な文章を理解し使用することではそれほど著しい遅れはみられない。
- ② 聴覚障害児は、複雑な構造の文章が話されたり書かれたりするのを正しく理解する能力が遅れる。

#### 1. 4 学業成績

- ① 多くの教科の成績に伸び悩みの影響が出る。特に読解力と数の概念、抽象的な論理を必要とする課題における遅れの影響が大きい。
- ② 個別の教科指導や言語指導の機会が用意されない、聴覚障害児と正常な聴力の子どもたちとの学業成績の差は学年が進むにつれて大きくなる。

#### 1. 5 心理・社会性

- ① 聴覚障害児は、孤独で自分には友達がいないという悩みを持つことが多い。これは主として聴覚の障害により友人とのコミュニケーション関係がうまくいかない時に顕著である。
- ② 心理社会的な問題は、重度な聴覚の障害を自己認識した子どもよりも、軽度から中等度の聴覚障害児に現れやすい。
- ③ 一方、健聴者との心理的・社会的な悩みから離れて聴覚障害児だけの友人関係に安住しようとする傾向も現れる。

心配される以上のような傾向は、聴覚障害児が学校で受けられるサポートサービスの量と質と時期、そして親の関わり具合次第でその影響に差が出る。できるだけ早い時期から補聴器を活用することを含めた適切な配慮や教育的援助がないと、重度・最重度の聴覚障害児の学業成績は小学校3年から4年どまりに、軽度から中等度の聴覚障害児でも正常な聴力の同級生たちよりも、1年から4年低いレベルに落ちてしまう。

### 2. 難聴の程度とその影響及び教育的配慮

難聴の程度（500～4000Hzの平均聴力レベル）に応じ

てどのように聞こえとことばに障害が及ぶか、心理的・社会的影響はどうか、それに対する教育の必要性和配慮はいかにあるべきかについて、一般的な様相を以下に述べる。

## 2. 1 **正常と難聴の境界** <16~25dBHL>

### 2. 1. 1 **聞こえとことばへの影響**

小声による会話や離れたところの会話を聞き取ることが困難となる。聴力が120dB程度でも、教師が離れている場合や、特にことばによる指導が主体の教科で、教室が騒がしい場合、会話の10%程度を聞き逃してしまう。

### 2. 1. 2 **心理的・社会的影響**

会話の内容を理解するのに大切な手がかりとなることばがはっきりしないために場にそぐわないことをしたりヘマをしたりする子どもだと見られてしまうことがある。友人たちのペースの速いやりとりが理解できない場合がある。このため、自信を失ったり社会適応の面で影響が出はじめることがある。また、幼稚な行動を示すことがある。聞き取る努力が必要なため、ほかの級友以上に疲れを感じることもある。

### 2. 1. 3 **教育的配慮**

聴力型にもよるが、低利得あるいは低出力の補聴器かFM補聴器が便利な場合がある。教室が騒がしかったり反響する場合、マイクを使つての拡声が有効な場合もある。座席の位置も適切にすべきである。特に、再発性中耳炎の既往歴がある場合は、語彙や発音に注意する必要がある。伝音難聴には、適切な医学的管理が必要である。担任教師は言語の発達と学習への難聴の影響について研修を受ける必要がある。

## 2. 2 **軽度難聴** <26~40dBHL>

### 2. 2. 1 **聞こえとことばへの影響**

聴力が30dB程度だと、25~40%の会話を聞き逃すことがある。学校での聞き取りの困難度は、教室での騒音レベル、教師との距離、聴力型に左右される。35~40dBになると、学級討論での会話の少なくとも50%を聞き逃すことがある。特に、声が小さかったり、話し手が見えない場合に聞き取ることができない。高周波数に聴力低下がある場合は、子音を聞き逃してしまう。

### 2. 2. 2 **心理的・社会的影響**

「自分に都合のよいことしか聴こえない」「ほんやりほかのことを考えている」「注意が散漫だ」などとめられることで自信を失くすことがある。大事なことを聞き逃さない選択的聴取能力が落ち始め、環境騒音に影響されやすくなり、学習環境がストレスの多いもの

になる。聞き取る努力が必要なため、級友たち以上に疲れを感じる。

### 2. 2. 3 **教育的配慮**

教室では、補聴器とFM補聴器または拡声用マイクの使用が有効である。適切な座席の位置と照明が必要となる。言語力の評価と教育的経過観察のために特殊教育機関へ照会する。聴能を高める必要がある。語彙と言語発達、発音、読話と読解力の指導に注意を払う必要がある。自信をつけさせるための援助が必要な場合もある。担任教師は聴覚障害教育についての研修が必要となる。

## 2. 3 **中等度難聴** <41~55dBHL>

### 2. 3. 1 **聞こえとことばへの影響**

知っている構文と語彙で話してあげれば、1~1.5mの距離で対面した会話が理解できる。しかし、補聴器をつけなければおよそ40dBの難聴の場合50~70%、50dBの難聴の場合80~100%の割合で会話を聞き逃す可能性がある。構文・語彙などの言語能力の遅れと発音の未熟さや声質の歪みなどが起こりやすい。

### 2. 3. 2 **心理的・社会的影響**

しばしば、この程度の難聴でも、コミュニケーションに著しく影響を受け、正常な聴力をもつ仲間との交友関係がますます難しくなる。常時補聴器をつけ、マイクの世話になっている様子を周囲が見て、不当に能力の低い子どもと見なされてしまう場合がある。自尊心が傷つけられる場面が出てくる。

### 2. 3. 3 **教育的配慮**

言語評価と教育的経過観察のために、特殊教育機関に照会する。補聴器とFM補聴器が必要である。難聴学級などの教育が、小学校で必要になる場合がある。口語力、読解力、作文力の発達に注意を要する。聴能訓練と発音指導が通常必要となる。担任教師は聴覚障害教育について研修を受ける必要がある。

## 2. 4 **準重度難聴** <56~70dBHL>

### 2. 4. 1 **聞こえとことばへの影響**

補聴器がないと、ことばを理解させるために非常に大声で会話をしなければならない。聴力がおよそ55dB以上になると、会話の内容を100%聞き逃してしまう可能性がある。一対一やグループの会話において、音声言語による意思伝達の困難さは顕著となる。言語力の遅れ、発音の明瞭性の低下、調子の外れた声の出し方が認められる。

### 2. 4. 2 **心理的・社会的影響**

学校生活上の情報が不足するので、仲間や教師に学習能力の低い子どもと見なされてしまうことがある。

自己認識の甘さや社会性の未熟さを指摘されるようになり、周囲からの疎外感が生じる。

#### 2. 4. 3 **教育的配慮**

常時補聴器をつけることは不可欠である。言語力の遅れの程度により、専門の教師の指導を受けたり難聴学級に入ったりする必要がある。言語指導、言語を中心にした教科指導、読み書きの指導に特別の援助が必要となる。子どもの経験に基づいた言語の基礎を広げるための援助が必要である。通常の学級で学ぶ場合にはその担任教師は聴覚障害教育の研修を受ける必要がある。

### 2. 5 **重度難聴** <71~90dBHL>

#### 2. 5. 1 **聞こえとことばへの影響**

補聴器がないとき、耳から30cmぐらいからの大声がやっと聴こえる。補聴器が最適に調整されていれば、周囲の音が確認でき、会話音を聞き取ることができる。難聴が言語習得以前からある場合、放っておくと音声言語と発音は自然には発達せず、非常に遅れることがある。最近難聴になったのであれば、発音は損われ、声の出し方は調子はずれになりやすい。

#### 2. 5. 2 **心理的・社会的影響**

友達や遊び仲間として難聴をもつ相手を選ぶことがある。その結果、健聴児との交流の機会をさらに少なくしてしまうことになるが、こうした仲間との交友関係が、自己認識や聞こえない者としてのアイデンティティを培うことにもなる。

#### 2. 5. 3 **教育的配慮**

常時、聴能と読話の指導、言語指導と発音指導を強調した難聴学級の聴覚／口話プログラムを必要とする。難聴が80~90dBに近づくにつれ、特に、ことばを覚える初期の年齢には多感覚を活用したアプローチが有効となる。補聴器とFM補聴器の使用が必要である。コミュニケーションの方法が適切であるかをチェックすることが必要である。生徒にとって有効であれば、通常の授業に参加させる。その場合には担任教師の聴覚障害児教育についての研修が欠かせない。

### 2. 6 **最重度難聴** <91dB以上>

#### 2. 6. 1 **聞こえとことばへの影響**

適切な補聴器の調整を行えば、音声の韻律情報や母音を聞き取ることができる。しかし、音のパターンよりも振動の方がわかりやすい子どもは、コミュニケーションと学習の主要な手段として、聴覚より視覚に頼る。特別な教育をしなければ音声言語能力は発達しない。最近難聴になった場合には、保持していた音声言語が急速に退化する可能性がある。

#### 2. 6. 2 **心理的・社会的影響**

聴覚／口話能力、仲間の手話使用、両親の態度により、次第に聾文化に関わることを好むようになっていたり、逆に嫌うようになっていたりすることがある。

#### 2. 6. 3 **教育的配慮**

言語指導と教科指導を中心とした聾教育のプログラムが必要となる。聾教育が受けられないならば、専門家による指導と総合的な援助体制を必要とする。補聴器の早期使用が有効である。人工内耳や触振動覚補聴器の使用の可能性もある。コミュニケーション手段と学習方法の継続的評価が必要である。有効であれば、通常学級の授業に部分的に参加させる。

### 2. 7 **一側性難聴** <片方の耳は正常、他方の耳は恒常的な軽度難聴である場合>

#### 2. 7. 1 **聞こえとことばへの影響**

小声や離れたところの会話を聞くことが難しい。通常、音や声の方向を判断することが難しい。周囲が騒がしかったり、反響したりすると、会話を理解することがよりいっそう困難となることがある。難聴のある耳側から、特に、グループ討論で小声の会話を聞き取り、理解することに困難がある。

#### 2. 7. 2 **心理的・社会的影響**

静かな場面と雑音のある場面では、子どもにとってことばの理解力に差が生じるため、「聞きたいことだけを聞いている」と、とがめられる場合もある。聞き取る努力が必要なため、級友以上に授業で疲れを感じる。注意が散漫であったり、いらいらしているように見られることもある。行動上の問題が表面化することが時々ある。

#### 2. 7. 3 **教育的配慮**

教室では、補聴器やマイクによる拡声が有効と考えられる。CROS補聴器は静かなところで役立つ場合がある。適切な座席の位置と照明が必要である。学習困難に陥る危険性があり、困難な場面が生じたら直ちに援助できるように教育的配慮を欠かさない。担任教師の聴覚障害に関する研修が必要である。

## 文献

- 大沼直紀：「教師と親のための補聴器活用ガイド」，第2版，pp.13-17，(1997)，コレール社，
- 大沼直紀：「聴覚サポートガイド・あなたの耳は大丈夫？」，P H P 研究所，(1997)
- 大沼直紀：「聴覚障害教育における人工内耳適用の現状と課題」，特殊教育学研究，第35巻，第3号，(1997)
- 大沼直紀：「人工内耳が活かされるための教育環境」音声言語医学，第37巻，第3号，(1996)
- 大沼直紀：「Present Audiological Issues in Education of Hearing-Impaired Children in Japan  
Early Child Development and Care, Vol.122, (1996)
- 大沼直紀：「難聴小児の聴能と教育」，日本耳鼻咽喉科学会会報，第98巻，第10号，(1995):
- 大沼直紀：「学童期・青年期の補聴器適合と聴覚活用」，J O H N S，第11巻，第9号，(1995)

著者： 大沼直紀（筑波技術短期大学）  
ノエル・マトキン（アリゾナ大学）  
Naoki Ohnuma, Tsukuba College of Technology  
Noel D. Matkin, University of Arizona, Tucson

タイトル： 聴覚の障害が子どもに及ぼす影響と教育の必要性  
Effects of Hearing Impairment on Children

キーワード： 聴覚障害の影響，難聴の程度，心理社会的影響，聴覚障害児教育の必要性，  
effects of hearing impairment,  
degree of longterm hearing loss,  
psychosocial impact,  
educational needs of hearing impaired children